

相馬を歩こう!!第5弾

相馬と御仕法の歴史をたどる旅

相馬市千客万来館

二宮尊徳と相馬の仕法

天明と天保の二度の大火作で、ほとんど食田のほとんどに落ちて、もかいた当時の相馬中村藩の人々に、生きる光と力を与えてくれたのが二宮尊徳であった。幸いしてに藩主益胤が世に「文化の叢法」といわれている。藩政刷新の道を文化年間から閉じてくれている。その二へ新しく二宮の「興国安民の法」を採用するにこきまり、藩の仕事として弘化二年(一八四〇)から、次々に相馬全域の各村々に実施されていった。これが相馬で言う「御仕法」である。二宮の方法は、単なる農村の改良などという程度のもではない。ひろい世界観と人生観の中か、生まれた徳を以て徳に報いる「報徳」というおもしろい指導理念に由来する。至武、余長、勤業、推挙という四つの徳目を実行することと柱としていた。

この新しい方法を取り入れた相馬には、仕法もつとよと、理評者であった藩主の荒胤、藩主の師崎隆が居り、家老には草野正辰、池田胤直、藤川兵衛が居り、実際に仕法を指導する者には宮田高成、斎藤高行、荒至重ら多士濟々であった。

この人々が真摯心に臨み、心を合わせて和の精神と全力を注ぐことおよそ三十年、明治になつて相馬の仕法は完成したのである。二宮仕法を完成したのは全国に数多いかと、くに相馬ではほとんど理想的に行なわれたので今も仕法遺跡が多く残っているのは偶然ではないのである。



江戸時代後期にあった天明・天保の飢饉では、日本全国でたくさんの犠牲者を出し諸藩の財政も窮乏しました。相馬中村藩も同様で、特に天明の飢饉では、当時の人口の3分の2が亡くなるなど大きな被害を受けました。

そこで、農村を立て直し、藩を復興させるための方策の一つとして、**二宮尊徳**が主導した藩復興政策である「興国安民の法」を採用しました。相馬では、この法のことを「**報徳仕法**」または「**御仕法**」と呼んでいます。この御仕法について振り返り、170年以上前の先人たちの苦労や頑張りを感じてみてはいかがでしょうか。

参考文献

- ・相馬市HP
- ・「相馬報徳読本」 相馬市教育委員会
- ・「ふるさとの歴史 奥州相馬」 森 鎮雄
- ・「二宮金次郎・富田高慶からの贈り物」 旧原町市

1 二宮尊徳と天明・天保の飢饉



二宮尊徳(金次郎) 1787~1856

二宮尊徳(幼名金次郎)……1787年(天明7年)今の神奈川県小田原市の比較的裕福な農家の長男として誕生しました。不幸にして異常天候のため近くを流れる酒匂川(さかわがわ)の氾濫が度重なり、心身疲労のため父母が相次いで死去、一家離散。伯父の家に預けられますが、作業の合間に、稲の捨て苗や菜種を空き地に植えて収穫。毎年その収益を増やして田畑を買い戻し、成人後間もなく家の再興に成功。その手法を生かして近親者や小田原藩の家老や旗本家の立て直しを行いました。さらに優れた弟子たちと共にたくさんの村々や幕府領の再建を依頼され、財政再建・農村復興に務めました。1856年没。

天明・天保の飢饉について

①天明の飢饉

天明2年(1782)から同7年にかけての全国的飢饉。特に関東・東北に著しい被害を与えました。冷害による作物の凶作・浅間山の大噴火・洪水による被害等によって引き起こされました。これによる全国の死者は約92万人。凶作・米価高騰により百姓一揆、打ちこわしが続発しました。

②天保の飢饉

天保4年(1833)から同7、8年にかけて全国を襲った飢饉で、大雨による洪水や冷害によって凶作となりました。特に東北各地で多数の餓死者が出ました。天保8年、大坂で窮民に対して適切な救済措置がとられないことに憤激した大塩平八郎が豪商を襲撃して火を放つなど、各地で一揆や打ちこわしがおきました。死者は、全国で20~30万人に達したと推定されています。

2 相馬中村藩と天明・天保飢饉の飢饉

○相馬市の全体像をとらえるため、『相馬市歴史資料収蔵館』を訪れてみましょう。古代から近世までの相馬に関する資料を始め、相馬野馬追や相馬市出身の彫刻家佐藤玄々について、そしてもちろん御仕法に関する資料(天明救荒録・報徳記など)の展示もあります。

Checkpoint 1 相馬市歴史資料収蔵館

相馬市中村字北町51-1 (相馬市市民会館となり)

TEL 0244-37-2191

開館時間 9時~16時 観覧料 100円

休館日 毎週月曜日(月曜が休日の時、次の平日) 年末年始

○相馬市図書館では、中央通路に面した書棚に「二宮尊徳と御仕法コーナー」(児童向け)が、郷土資料コーナーにある「二宮尊徳関係資料」は、かなり専門的な内容のものです。

Checkpoint 2 相馬市図書館

相馬市中村字塚ノ町65-16 (振興公社駅ビル内)

開館時間 平日: 10時~19時

土・日・祝日: 10時~17時

休館日 年末年始、図書特別整理期間
(1月中の15日間)



○天明4年（1784年）、藩は幕府から5千両を借り入れ、養育料の支給をしたり、北陸方面から移民をおかえ入れたりして回復につとめました。借金30万両をこえてしまいました。

CheckPoint 3 正西寺 相馬市中野字北反町145

北陸地方からの移民を奨励したことにより浄土真宗門徒が増加し、菩提寺が必要になったため設立されました。山門（高麗門、切妻、棧瓦葺、一間一戸）は明治維新後、中村城が廃城となり払い下げられたもので、中村城の少ない遺構として相馬市指定有形文化財に指定されています。又、本堂裏にあるイチョウは推定年齢600年、樹高28m、幹周5.8mの巨木で、葉の状況から田植えの時期を決めたという民俗的にも意味深いもので、相馬市指定天然記念物に指定されています。



○相馬中村藩でも大きな影響を受け、天明の飢饉のあとは、米の収量は17万5千俵から2万40俵に、人口は約9万人から約3万2千人に大きく減りました。

Checkpoint 4 天明餓死供養碑



相馬市新沼にある新沼観音(奥相33観音第1番札所)の入口に建っています。



○こうしたことから、文化14年(1817年)にはきびしい儉約令を出し、6万石の格式を1万石に切りつめるなどの政策も実施。この儉約令を「文化の御厳法(ごげんほう)」といいます。

○天保の飢饉(天保4年・1833)のとき、中村藩は凶作の兆しが見え始めたころから対応準備に取りかかり、江戸から米などを買い入れて武士・農民らに支給しました。そのため領民たちの餓死は防ぐことができました。しかし、藩の財政は極めて苦しい状況になり、厳法をさらに10年延長しました。そして弘化2年(1845年)に「興国安民法(御仕法)」をとり入れた施策を開始しました。

3 相馬中村藩における御仕法

○御仕法は、中村藩第12代藩主相馬充胤（そうまみちたね）公の理解のもと、藩の一大事業として積極的にすすめられました。二宮尊徳自身が相馬の地をおとずれることはありませんでしたが、中村藩士で二宮尊徳の弟子であった富田高慶（とみたこうけい）が、二宮尊徳の代理として指導にあたりました。

Checkpoint5 二宮尊徳先生座像



中村城跡(馬陵公園)内

秋は紅葉が美しい赤橋の二の丸球場よりです。



Checkpoint 回村の像



千客万来館前報徳公園内

CheckPoint7 金蔵院地蔵堂

共に相馬市西山愛宕山史跡内



二宮尊徳廟の拝殿として慶応2年(1866)に中村藩により建立されました。須弥壇には尊徳の木像が安置され、慈隆尊師が朝夕読経し、尊徳の冥福を祈ったといわれています。



CheckPoint8 二宮尊徳墓



尊徳は安政3年(1856)10月20日、70歳で今市で没し、如来寺に葬られました。中村藩では遺髪を葬り、安政4年7月墓碑を建立しました。尊徳の戒名である誠明院功誉報徳中正居士から墓碑は「誠明先生墓」となっています。

CheckPoint 9 相馬市成田

「御仕法発祥の地」の碑

相馬中村藩の仕法は
弘化2年(1845)12月、
成田村(1日)と坪田村
(4日)で始まりました。



相馬市富沢

CheckPoint 10 宗兵衛堤

御仕法では、たくさんの溜池が造られました。そのうちの宗兵衛堤は、付近にある又右衛門、土井、新堤、堀釜の4つのため池を水路で結び、それぞれが満水になるように工夫されています。池の側に宗兵衛堤の報徳碑が建立されています。 嘉永5(1852)~安政4(1857)造成



4 相馬中村藩二宮仕法功労者

相馬藩では、藩主をはじめ多くの方が御仕法に取り組みました。その中から中心となって活躍した人々をご紹介します。

CheckPoint 13 円応寺 熊川 胤隆(たねたか)の墓

中村藩の重臣熊川家に生まれました。弘化4年(1847年)に家老となり藩政全般にわたり指導を進め、御仕法にも積極的に取り組みました。

CheckPoint 14 歓喜寺 荒 至重(むねしげ)の墓

江戸で和算・測量・天文学を学び、藩に帰ってからは、高度な数学や緻密な測量をもとに数々の難工事を完遂しました。明治26年いわきの平町長就任。鹿島区に学問の神として至重を祀った南右田神社があります。

CheckPoint 12 佛立寺 池田 胤直(たねなお)の墓

寛政3年(1791年)代々家老職を勤める池田家に生まれました。文政2年(1819年)28歳の若さで家老になりました。報徳仕法のことを知り、はじめ反対していた家臣を熱心に説得し、藩として取り組むようにしました。

CheckPoint 11 洞雲寺 草野 正辰(まさとき)の墓

安永元年(1772年)藩士の子として生まれました。いろいろな役職を経て江戸家老となりました。その時出会った報徳仕法が藩財政立て直しのためにどうしても必要だと考え、相馬藩内の同意や尊徳の了解を得るなどして御仕法の導入に力を尽くしました。

お墓を巡る際は、静かにするなどマナーを守ってお願いします。

CheckPoint 15 二宮 文・齋藤 高行の墓

二宮 文……二宮尊徳の娘で、富田高慶の妻となり、中村に来ました。夫高慶を助け、藩士のこどもたちには手習いを教えました。出産のため東郷（栃木県）に帰り、そこで亡くなりました。遺髪が蒼龍寺に葬られました。

齋藤 高行……富田高慶の甥にあたり二宮四大門人の一人として御仕法の後半を高慶に代って指導しました。明治27年6月中村で76歳の生涯を終え、蒼龍寺に葬られました。※蒼龍寺は、馬場野に移転しました。



線路の下をくぐります。
頭上注意!

